

平成 22 年 6 月 8 日現在

研究種目:若手研究(B)

研究期間:2006~2009

課題番号:18730417

研究課題名(和文) 幼児・児童における危険状況の認知の発達
—子どもの安全教育に関する心理学的研究—

研究課題名(英文) The Development of How Children Deal with Stranger Danger:

A New Approach to Safety Education based on Development Psychology

研究代表者

江尻 桂子 (EJIRI KEIKO)

茨城キリスト教大学・生活科学部・准教授

研究者番号:80320620

研究成果の概要(和文):

幼児・児童における危険認知能力の発達過程について、実験的に検討した。その結果、こうした認識が芽生え始めるのは年長児頃であること、正しい危険認識に基づき、危険回避行動ができるようになるのは小学1年以上であることが示された。また保護者へのアンケート調査から、保護者らは不審者の連れ去りに関して不安を感じてはいるものの、そうした事件に子どもが自ら巻き込まれる可能性は低いと考えていること、また、我が子の危険回避能力について必ずしも正しく認識しているわけではないことが示された。これらの結果をもとに、幼児・児童における発達水準に応じた防犯教育のあり方を提案した。

研究成果の概要(英文):

This study explores the development of children's ability to deal with so-called stranger danger situations. Participants were 4- and 5-year-old preschoolers and 6- and 7-year-old schoolchildren (N = 166). The results indicate that 4- and 5-year-old preschoolers are still vulnerable to the dangers posed by strangers, although some of them show wariness and understanding of the danger. Moreover, 6- and 7-year-old schoolchildren understand the potential dangers posed by strangers and know how to avoid them. These findings are discussed in relation with the prevention program for preschoolers and schoolchildren.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	1900,000	360,000	2260,000

研究分野： 発達心理学

科研費の分科・細目：教育心理学

キーワード： 安全教育 防犯教育 リスク

危険認知 認知発達 幼児 児童

1. 研究開始当初の背景

- (1) 近年、奈良県や千葉県で起きた児童誘拐殺人事件に代表されるように、子どもを狙った略取・誘拐事件が後を絶たない。
- (2) こうした社会情勢のもと、子どもの安全・安心を守るための取り組み、また、子どもへの防犯教育に対する関心・ニーズが高まってきた。
- (3) しかしながら、幼児期から児童期にかけての各年齢の子どもたちが、どの程度の危険認知能力および危険回避能力があるのかについては実証的なデータがほとんどなく、防犯教育を考える上での基礎的な資料に欠けていた。

2. 研究の目的

- (1) 略取誘拐事件を未然に防ぐための、一つ的手段として、発達心理学的アプローチ（幼児・児童を対象とした実験）により、子どもの危険状況に対する認知の発達過程について明らかにすることを目的とした。
- (2) 上記(1)によって、より有効な防犯教育を考えるための基礎的な資料を提供することを目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 実験1, 2では、幼児（年中・年長）小学生（1・2年生）を対象に、紙芝居を用いた実験を行い、幼児期から児童期にかけての各年齢の子どもたちが、危険状況、とくに見知らぬ人物が接近してくるという状況について、どの程度、危険性を認識しているのか、また、それらの認識に基づき、どの程度適切な行動を選択することができるのかを検討した。
- (2) 幼児・児童をもつ保護者を対象にアンケート調査を行い、保護者らの防犯に対する意識、家庭における防犯教育の実際、また、子どもの危険認知能力に関する親の認識について明らかにした。



図1 実験で使用了紙芝居例
(男児の被験児用)

- 上段の絵（紙芝居1枚目：物語の導入場面）
ナレーション例：「～くん（さん）（被験児の名前）はひとりでおうちに帰るところです。」
- 中段の絵（紙芝居2枚目：人物との遭遇場面）
ナレーション例：「すると、むこうから男の人がやってきました。～くんがまだ一度も会ったことのない人（いつも保育園で会っている先生）です」
- 下段の絵（紙芝居3枚目：人物からの誘い場面）
ナレーション例：「そしてその人はこういきました。『この近くで子犬が生まれたんだ、ちょっと一緒に見に行かない？』」

4. 研究成果

- (1) 年中児(4~5歳)は、未知の人物との遭遇場面における危険認知がまだ難しく危険を回避することができない。しかし、年長児頃(5~6歳)からこうしたことが可能になる(図2・図3)。このことを5歳後半における情報処理能力の質的・量的な転換という観点から説明した。
- (2) 適切な認識にもとづいて危険回避行動を取ることができるようになるのは、小学生1年生以降であることが示された。
- (3) 小学生であっても、接近人物が、困っている状態にあり、その人から助けを求められるような場面では、相手の要求に従いやすくなる。このことから、児童期は、すでに危険を認知することができる段階とはいえ、その時々状況によって判断が揺らぎ、危険回避行動をとることが難しくなる段階であるといえる。こうした児童期の傾向について、向社会性の発達との関係で考察した。

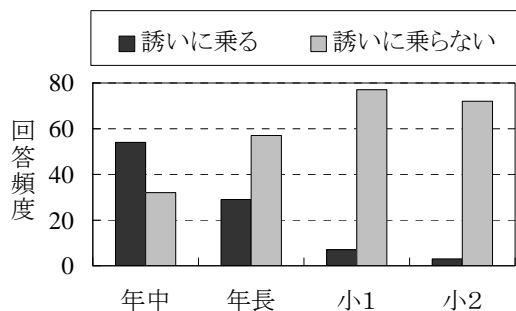


図2 未知人物に対する反応：年齢・反応カテゴリ別の回答頻度

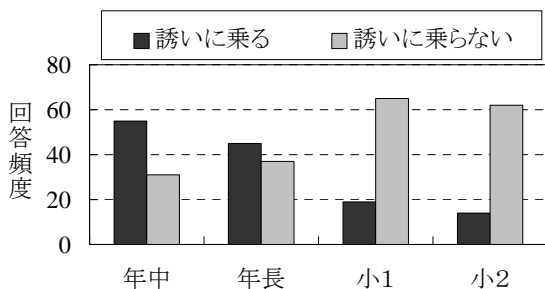


図3 既知人物に対する反応：年齢・反応カテゴリ別の回答頻度

(4) 幼児・児童の保護者に対して行なった、アンケート調査の結果から、次のことが明らかとなった。

- ①いわゆる不審者による、我が子の連れ去りの可能性に対して、多くの保護者は不安を感じている。
- ②一方で、保護者の多くは、「実際に我が子が自ら不審者についていってしまう」可能性はあまりないと考えている。
- ③保護者の予測する我が子の危険回避能力と、実際の子どもの危険回避能力とは必ずしも一致しない。

①～③から、保護者らは不審者の連れ去りに関して不安を感じてはいるものの、そうした事件に、子どもが自ら巻き込まれる可能性は低いと考えていること、また、我が子の危険回避能力について必ずしも正しく認識しているわけではないことが示された。

以上に示したように、本研究では、子どもの安全・防犯教育を考えるための基礎的資料を提供することを目的に、幼児、児童を対象に、未知・既知人物との遭遇場面における危険認知の発達について実験的に検討してきた。

そして、(1)～(4)の研究結果をもとに、より有効な安全・防犯教育プログラムの開発に向けての提言を行なった。

子どもへの安全・防犯教育については近年、その必要性が強く求められているものの、幼児や児童が実際にどの程度の危険認知能力があるのかを実証的に検討した研究は過去にほとんどなかった。そうした意味で本研究は、子どもの安全・防犯教育を考える上で、発達心理学的アプローチを試みた先駆的研究として、意義あるものと言えよう。

今後の課題としては、こうした危険認知の発達を促すものとして、どのような要因が関与しているのかを詳しく検討してゆくことが重要である。

例えば、他者の視点の理解や、嘘や騙しの理解、向社会性の発達などといった個人内の発達要因との関連について探るとともに、地域や学校、家庭等における防犯教育、また、子どもの生活環境や、社会・文化的環境といった外的な要因との関連についても検討してゆく必要があるだろう。そして、これらによって得られた知見をもとに、より有効な安全・防犯教育プログラムの開発へとつなげていくことが喫緊の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

江尻桂子(印刷中) 幼児・児童における危険認知の発達:子どもの安全・防犯教育を考えるための発達心理学的アプローチ、発達心理学研究

〔学会発表〕(計3件)

(単独発表)

- ①江尻桂子、子どもの危険認知能力を保護者はどう認識しているか—保護者を対象としたアンケート調査から—、日本発達心理学会第21回大会、神戸国際会議場 2010年3月28日
- ②江尻桂子、子どもの防犯に対する保護者の意識—幼児・学童の保護者を対象としたアンケート調査から—、日本発達心理学会第20回大会、日本女子大学、2009年3月23日
- ③江尻桂子、幼児・児童における危険状況の認知の発達(2)—いかなる状況で、子どもは既知・未知人物についていくのか—、日本発達心理学会第19回大会、大阪国際会議場、2008年3月21日

〔図書〕(計2件)

(分担執筆)

- ① 内田伸子・袖井孝子(編)、子どもの暮らしの安全・安心—命の教育へ 第1巻、金子書房
江尻桂子担当項目:
 - ・ 「幼児は見知らぬ人からの誘いを断ることができるのか」(p.72-76)
 - ・ 「子どもはどのようにして命の大切さに気づくか」(p.103-107)
- ② 内田伸子・袖井孝子(編)、子どもの暮らしの安全・安心—命の教育へ 第2巻、金子書房
江尻桂子担当項目:
 - ・ 「児童は見知らぬ人からの誘いを断ることができるのか」(p.24-28)

〔産業財産権〕

- 出願状況(計0件)
- 取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.icc.ac.jp/univ/fuku-ken/ejiri/index.html> (研究成果報告を掲載)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

江尻 桂子 (EJIRI KEIKO)

茨城キリスト教大学・生活科学部・准教授

研究者番号: 80320620

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし